

「連帯のうちに平和な世界を築く」

平和旬間

カトリック司教協議会会長 談話発表



6月29日から7月2日まで韓国で行われた日韓脱核平和巡礼。▲④6月30日、韓国・陝川^{ハプチョン}にある原爆2世の憩いの場「平和の家」で、平和を願うメッセージを木の枝に結ぶ韓国・生態環境委員会委員長のパク・ヒョンドン大修道院長（聖ベネディクト会）（手前）と日本の「いのち・平和・人権委員会」委員長、森山信三司教（大分教区）。▶⑤毎年8月6日に韓国原爆犠牲者のための慰霊祭が行われる「慰霊閣」前での参加者たち



◀⑥は沖縄「慰霊の日」の6月23日、那覇市の小禄教会^{おろく}から糸満市の戦没者慰霊塔「魂魄之塔」^{こんぱく}④まで巡礼し、祈りをささげるウエイン・バートン司教（那覇教区／中央）と平和巡礼参加者たち

国際

- 教皇、聖カブリーニの生誕の地を訪問 2面
- ベネズエラ地震 教会の支援本格的に 2面
- 教皇、2033年に超教派で祈りを 2面
- EU議会、移住者政策を厳格化 欧州司教団「人道的懸念」示す 3面
- 教皇、国連食糧計画本部でスピーチ 3面
- 第2回臨時枢機卿会議開催 教会は世界の分断を癒やす 3面
- その他の国際記事 3面

国内

- 心を合わせて「NO MORE WAR!」 那覇教区平和巡礼 4面
- 沖縄の視座から聖書を読む 谷大二名誉司教に聞く 4面
- 宮城涼子修道女に聞く 戦地フィリピンと沖縄に生きて 4面
- 日韓脱核平和巡礼と懇談会 在韓被爆者を訪問 連帯13年の実り 4面
- 日本カトリック神学院 知的養成に進展 5面
- 毎週開く多国籍の教会学校 三重・上野教会 5面
- 書籍『ヒトラーを怖れなかったキリスト者たち』 5面
- その他の国内記事 5面

- 教皇レオ14世初の回勅 「人間の偉大さ」要約 第1回 6面
- 定例司教総会『教会の祈り』改訂へ 作業開始を承認 7面
- 映画／月刊誌 紹介 7面
- 平和旬間 司教協議会会長談話「連帯のうちに平和な世界を築く」 8面
- 2023～26年 叙階の司祭・助祭・終身助祭 ① 8面
- 主日の福音解説 9・10・11面
- 短歌・俳句 11面
- 訃報、告知板、番組、お知らせ 12面
- きょうをささげる（8月の祈り） 12面

オンラインで日々ニュースを配信している「カトリックジャパンニュース」のダイジェスト紙、月刊「カトリックジャパンダイジェスト」をお届け致します。本紙は無料です。

カトリックジャパンニュース



カトリックジャパンダイジェスト 第16号

発行＝カトリック中央協議会広報部

〒135-8585 東京都江東区潮見2-10-10 日本カトリック会館

電話(03)5632-4435 FAX(03)5632-7030

国際

教皇 聖カブリーニの生誕の地を訪問 米国で母国からの移住者に献身

【サンタンジェロ・ロディジャーノ(イタリア)
6月20日OSV】教皇レオ14世は6月
20日、聖フランチェスカ・サベリオ・カ



6月20日、パドバの聖アントニオと聖カブリーニにささげられた小教区で話す教皇(OSV)

ブリーニの出身地、イタリア北部サンタンジェロ・ロディジャーノを訪問し、聖カブリーニの心臓の聖遺物を崇敬し、移住者への奉仕という彼女の使命が今日もなお重要な意味を持っていることを強調した。

パドバの聖アントニオと聖カブリーニにささげられた小教区で、教皇は「私は、移住者の保護聖人であり、米国初の聖人でもあるマザー・カブリーニに敬意を表すためにここにいます。マザー・カブリーニは、1850年にサンタンジェロ・ロディジャーノで生まれ、1917年に私の故郷であるシカゴで亡くなりました」と語った。

教皇は、この日早くにパビーアにある聖アウグスティヌスの墓前で祈り、その後、この聖カブリーニの誕生の地を訪れた。ここでも何千もの人々が、教皇を出迎えた。

教皇はマザー・カブリーニの人生を振り返り、当初は中国への宣教を希望していた彼女の熱意を、教皇レオ13世がどのように、米国でイタリアからの移住者に奉仕するよう促したかを思い起こさせた。

教皇は、彼女の証しを特に時宜を得ていると宣言し、こう問いかけた。「移住者の方々に奉仕しようとする宣教の熱意ほど、今日においても大切なことがあるでしょうか」

バチカンへ戻る前、教皇は青年たちに、聖カブリーニの模範から学ぶよう励まし、「青年の皆さん、皆さんは世界を変えることができます。私たちは皆さんを待っています」と言って、訪問を終えた。

ベネズエラ地震 教会の支援本格的に 国内問題山積で救助・復旧作業に遅れ

【ワシントン(米国)7月8日OSV】6月24日、立て続けに発生した2度の大地震で死者を出したベネズエラが、復興に向けて歩み出す中、米国のカトリック教会の指導者たちと団体は、引き続き同国を支援している。

米国司教協議会の公式な海外人道支援・開発支援局であるカトリック・リリーフ・サービス(CRS)の広報担当者、ブリタニー・ウィッテンドールさんは7月8日、OSVニュースの取材に、同団体は現地のカリタスベネズエラと「とても緊密に連携して支援に当たっています」と述べた。

CRSとカリタスベネズエラ、両団体とも全カトリック教会の世界規模の人道支援を行う国際カリタスに所属する。

ウィッテンドールさんは、CRSの「地震対応支援チームは」現在、ベネズエラに「十分に配置されています」と明言。「CRSが支援する配給は先週から始まっており、現在のところ、1800食以上の緊急食料、家庭用の衛生用品850セット、400人分の乳児用の衛生用品を配布しました」と語った。

しかし、救助・復旧作業は妨げられている。長年にわたって続いている問題がある



6月25日、ベネズエラのラグアイラで、がれきの中に自身の妹とおいを探す消防士(OSV)

ためだ。世界最大の原油埋蔵量を誇りながらも、同国は何年間も、独裁体制、人権侵害、地域特有の汚職、経済崩壊に悩まされている。



◀ **カリタスジャパン「ベネズエラ地震救援募金」受け付け中**



キリストの死と復活から2000年 教皇、2033年に超教派で祈りを

【ローマ(イタリア)6月30日OSV】教皇レオ14世は6月30日、全てのキリスト者に対し、2033年の記念の年に向けて協力し合うよう求めた。2033年は、イエス・キリストの死と復活から2000年に当たり、カトリック教会では特別聖年を記念する。

教皇がこの発言を行ったのは、東方正教会コンスタンチノーブル総主教庁からの使節団との謁見でのことだった。歴代教皇と同総主教は過去数十年間、互いの守護聖人の祝日に使節団を派遣し合っており、教皇庁(バチカン)は前日の聖ペトロ聖パウロ使徒の祭日に当たる6月29日、総主教庁



6月29日、東方正教会コンスタンチノーブル総主教庁からの使節団代表と教皇(OSV)

からの使節団を迎え、教皇司式のミサの終わりに、聖ペトロ大聖堂の地下聖堂にある聖ペトロの墓前で共に祈りをささげた。

「使節団の皆さんが来てくださったことは、コンスタンチノーブルの私たちの姉妹教会、そしてその牧者であり指導者のバルトロマイ1世総主教との兄弟としての絆を表すものです」と教皇は30日の謁見の中で感謝を述べた。

教皇はこの謁見で、キリストの受難と死と復活から2000年を記念する特別聖年の2033年について言及した。この節目の年が、全てのキリスト者にとって共通した時となることを期待してのことだ。

「2033年に、キリストのあがないから2000年を祝うための旅路が、世界のあらゆるキリスト教教派によって、共に歩まれますように。そして復活された方を証しするたまものと召命を再度見いだすことができますように」と教皇は願った。



国際

E U議会、移住者政策を厳格化
欧州司教団「人道的懸念」示す

【ブリュッセル（ベルギー）6月19日OSV】欧州司教委員会は、最近、欧州連合（EU）で承認された移住者に関する新たな規制について、倫理的・人道的に深刻な懸念を生じさせると警告した。強制送還までの期間の大幅な短縮と移住者の収容期間の延長などが含まれているためだ。6月17日に発表された声明の中で、欧州連合司教協議会連盟会長であるイタリア・ラティーナ教区のマリアーノ・クロチアータ司教は、各国政府には移住者の流れを管理し、国境を明確にし、人身取引と闘うべき正当な責任がある」というカトリック教会の認識を示した。



6月のスペイン訪問時、グラン・カナリア島で、海で命を落とした移住者たちのために祈りと花束をささげた教皇レオ（OSV）



記事全文

教皇、国連食糧計画本部でスピーチ
食料の充足は基本的人権

【ローマ（イタリア）6月22日OSV】世界では人命よりも紛争が優先され、基本的な人道支援物資よりも多くの武器が流通し、飢餓は悪化の一途をたどっている、と教皇レオ14世は6月22日、ローマに本部を置く国連世界食糧計画（WFP）でのスピーチで指摘した。教皇はWFPの職員たちに、人間の苦しみを和らげることは重要だと「原則として」広く認識されている一方で、人道支援の必要性は「世界の優先順位」の中で後回しにされていると述べた。「この現実、運用上の欠点だけでなく、政治と道徳の優先順位の基本的な不均衡をも反映しています」



6月22日、ローマにある国連食糧計画の本部で、職員たちに話す教皇レオ14世（OSV）



記事全文

第2回臨時枢機卿会議開催
教会は世界の分断を癒やす

【バチカン6月27日CNS】世界中から集まった枢機卿たちは、カトリック教会には、深まりつつある世界の二極化と社会の分断に対処し、福音を強力に宣べ伝える必要性があることを強調した。これは、バチカンで6月26日から27日にかけて行われた臨時枢機卿会議＝写真・CNS＝でのこと。この中で、教皇レオ14世は枢機卿たちに、戦争を「神が決して喜ばれないもの」として拒絶し、教会の使命である傾聴、協力、シノダリティ（共に歩むこと）を大切にしよう促した。同会議は非公開なためバチカン広報局が会議要約を発表。それによると、今日の世界を形づくる「深い分断」とその悪影響が貧しい人、周縁に追いやられた人、若者に過度に降りかかっている現状を中心に話し合



いが行われた。



記事全文

正教会の世界遺産の大聖堂に爆撃 カトリック指導者もロシア非難

【キーウ（ウクライナ）6月15日OSV】カトリックと正教会の指導者たちは、ロシアのドローン（無人機）攻撃によって、ウクライナのキーウにある歴史的な修道院施設が激しく損傷したことに驚きと怒りを隠さない。施設内の大聖堂が炎上した。この修道院は、「世界の正教会の最も聖なる場所の一つ」。



記事全文

カナダ「安楽死法」施行10年 同国司教団が懸念表明を呼びかけ

【オタワ（カナダ）6月17日OSV】カナダのカトリック司教協議会は、カトリック信者と善意ある全ての人々に、同国で施行10年を迎える「死への医療的援助法」について、「あらためて懸念を表明するよう」呼びかけた。「カナダにおいて安楽死の現状が当然視されていることに反対します」と声明。



記事全文

米最高裁、「一時保護資格」停止を支持 ハイチ出身信徒在留に懸念

【タコマパーク（米メリーランド州）7月1日OSV】米国連邦最高裁は6月25日、米国に住むハイチやシリア出身の移住者を強制送還から守る一時保護資格を、トランプ政権が停止できるという判決を下した。28日、ワシントン教区のハイチ出身者共同体が参加した主日のミサには数百人が集い、祈った。



記事全文

教皇、ランペドゥーサ島を訪問 命落とした移住者へ祈り

【ランペドゥーサ島（イタリア）7月4日CNS】米国出身初の教皇は、建国250年を記念する7月4日、それを祝うより先に、移住者たちの欧州への玄関口となる島で、埋葬された移住者たちのために祈り、無事たどり着いた人々と会い、戦争や迫害、貧困などから逃げてきた人々が住む場所でミサをささげた。



記事全文

ニカラグアで司教拘束 教会弾圧で300人以上が亡命

【マナグア（ニカラグア）7月7日OSV】また一人のニカラグアの司教が警察に拘束され、行方不明となっている。ますます独裁色を強める同国で、「信教の自由に対する攻撃」が引き続き行われていることを受け、米国は非難の声を上げた。フアン・アベラルド・マタ司教は6月29日、警察に拘束された。



記事全文

中国地下教会の牧師釈放 「家族と再会」と米国政府関係者

【ワシントン（米国）7月6日OSV】中国の地下教会であるシオン教会の創立者であり牧師のエズラ・ジン・ミンリ（金明日）氏は、同国で良心の囚人（政治的・宗教的な信念に基づく理由で不当に拘束されている人）となっていたが釈放され、米国で家族と再会したと米政府関係者は語った。



記事全文

中央アフリカで司祭殺害 紛争解決と平和構築に尽力

【バンギ（中央アフリカ共和国）7月7日OSV】中央アフリカ共和国で、平和と和解のために取り組んできたクリパン・マーシャル・モンガ神父が6月29日、南東部の都市ゼミオにある自宅近くで、武装した複数の男性によって殺害された。詳細はまだ不明。中央アフリカは、武力紛争や大規模な国内避難の問題や極度の貧困といった複雑な政治的・人道的危機に直面している。



記事全文

スーダンの司教 武装勢力が包囲する都市に残る決断

【エルオベイド（スーダン）7月9日OSV】ユナン・トンベ・トリルク・アングリ司教は、自身が託された信者への忠実さを示す証しと評される決断をした。スーダン北部の州都エルオベイドは徐々に準軍事組織とその同盟軍に包囲されつつあると、複数の団体から警告を受けながらも、司教は同地に残っている。



記事全文

国内

心を合わせて「NO MORE WAR!」 那覇教区平和巡礼

戦後81年を迎えた沖縄「慰霊の日」の6月23日、那覇教区では40回目となる「カトリック那覇教区平和巡礼」を行った。県内外から信徒ら80人余りが参加。沖縄戦で犠牲となった20万人を超える人々の命を思い、小禄教会（那覇市）から糸満市



魂魄之塔で祈りと花をささげる巡礼参加者

の戦没者慰霊塔「魂魄之塔」まで、5時間かけて歩いた。

巡礼に先立ち、午前6時から、小禄教会で「平和祈願 追悼ミサ」がささげられた。

ミサを主司式したウェイン・バートン司教（那覇教区）は説教で、平和を実現したいのなら「私たちがまず自分の心の中で闘わないといけません。憎しみを捨てる。差別を捨てる。その代わり自分の中に、全人類に対する愛情を身に着ける」よう呼びかけた。「もし自分の心の中に憎しみや恨みが残っているのなら、この（小禄）教会で下ろして、平和と正義のために（魂魄之塔がある）摩文仁まで歩んで行きたいと思えます」。バートン司教には沖縄を、二度と

戦争のために使わせない、全て軍事基地を沖縄から無くすという「夢」があると話し、平和実現のために、今日の巡礼を始めたいと話した。

ミサ後、参加者たちは巡礼に出発。梅雨の合間の晴天の、刺すような日差しの中を歩いた。途中3カ所で、戦争体験者の証言集の朗読に耳を傾けて祈り、聖歌を歌った。ひめゆり会館駐車場では沖縄カトリック中学高等学校の中学1年生50人も合流した。

魂魄之塔前で行われた祈りの集いでは、同校の中学3年生4人が、平和巡礼を通じて戦争の悲惨さや命の尊さについて考えたことや、平和実現への決意を表明。続いて4人の信徒らが交代で今年の沖縄慰霊の日・平和メッセージ「沖縄からの叫び『NO MORE WAR!』」を読み上げ、最後に全員で「NO MORE WAR!」と三度、声を上げた。



記事全文

沖縄の視座から聖書を読む 谷大二名誉司教に聞く

さいたま教区の谷大二名誉司教＝写真＝は、2013年、引退した翌日に沖縄に移住し、那覇教区で正義と平和に関わる活動や黙



想指導などに携わった。がん治療のため埼玉で暮らすようになった今も沖縄に心を寄せ続けている。この春、「沖縄の視座」から詩編を読んだという谷司教に今の思いを聞いた。谷司教にとって沖縄は、差別する側にいることに無自覚な“普通の日本人”だった自分に、「底突き」

とも言える体験をもたらした場所だという。沖縄との出会いは、あらゆる抑圧や差別の歴史を知ることにつながり、今も苦しみ続ける人々と共に歩むよう、谷司教を促してきた。



記事全文

宮城涼子修道女に聞く

戦地フィリピンと沖縄に生きて

宮城涼子修道女（91／聖マリアの汚れなき御心のフランシスコ姉妹会）＝写真＝は、沖縄からフィリピンに出嫁ぎに出ていた両親の下、ミンダナオ島で生まれ育った。幼い時に戦争の悲惨さを目撃。11歳の頃、現地で太平洋戦争の終戦（1945年）を迎えた。後に沖縄で修道生活を送る中、日本人男性に対して激しい嫌悪を感じるようになったことをきっかけとして、祈りのうちに自身の奥底に息づく戦争の記憶へと降りていく体験をする。同会与那原修道院に宮城修道女を訪ね、フィリピンでの戦争体験と、「記憶の癒やし」から始まったという、ゆるしと和解の歩みについて聞いた。



記事全文

日韓脱核平和巡礼と懇談会 在韓被爆者を訪問 連帯13年の実り

核兵器や原発のない世界の実現を目指す「日韓脱核平和巡礼と懇談会」が6月29日から7月2日まで4日間、韓国で行われた。日韓の教会がこの名称で例年催していた公式巡礼（共催＝韓国司教協議会生態環境委員会、日本司教協議会旧・正義と平和協議会）は2024年に終了したが、今回は特別に従来の巡礼に倣うプログラムで韓国の教会が主催した。

開催テーマ「平和と核—正義に基づく平和、記憶から学ぶ」の下、日本側は今春新設された「日本カトリックいのち・平和・人権委員会」委員長の森山信三司教（大分教区）、講師を務める松浦悟郎司教（名古屋教区）と信徒ら17人が参加。韓国側の

27人と共に「韓国のヒロシマ」として知られる町、陝川を訪れ、在韓被爆者と出会った。13年続いた日韓両教会の脱核を巡る連帯の上に、一人一人が平和の担い手としての思いを新たにしたい。

今回の巡礼も日韓の教会が共催していた公式巡礼のように原発立地地域を訪れ、住民や専門家の話に学び、ミサをささげた。

韓国では巡礼直前、原発の建設や運用を担う公営企業「韓国水力原子力」が新規の大型原発と小型モジュール炉（SMR）の建設候補地を、原発が密集する東沿岸の2カ所に確定した。これを受け、

現地学習の訪問先に急きょSMRの建設候補地となった釜山市機張郡も加えられた。

巡礼2日目は、「韓国のヒロシマ」と呼ばれる韓国南東部の町、陝川を訪れた。町には日本で被爆した朝鮮半島出身者とその子孫が多く、大韓赤十字社によれば、生存している被爆者1540人中、225人が陝川に住む（2025年）。一行は日本人の有志個人が原爆犠牲者のために建設したという「慰霊閣」を訪れ、祈りをささげた。



記事全文



韓国・陝川（ハプチョン）の原爆資料館（正面奥）を見学した巡礼参加者と、一行を案内した資料館館長ら（右）在韓被爆者たち

国内

日本カトリック神学院
知的養成に進展～上智大学神学部との提携により～

日本カトリック神学院（東京・練馬区）は今年度から神学生の知的養成に関する仕組みにおいて進展を遂げている。上智大学神学部との提携が正式に承認され、教会認可学位の授与などを行うことのできる教会的研究教育機関としての体制が整ったことによる。このことで、神学院の学術レベルの維持と向上が促進され、神学生・司祭が後に海外留学するためにも有効な資格が得られることになり、将来の教員養成にも弾みがつくこととなる。さらに、より広い意味で、日本の教会における神学研究、神学教育の拠点となっていくことが期待される。ここに至る経緯、その意義についてこの提携の手続きに携わった同神学院養成者の浅井太郎神父（名古屋教区）に話を聞いた。



日本カトリック神学院



記事全文

毎週開く 多国籍の教会学校
子どもが中心 みんなの居場所に 三重・上野教会

三重県伊賀市の上野教会（ホセ・ゴンザレス神父／グアダルペ宣教会）では、毎週土曜日、外国にルーツを持つ小中学生のための教会学校が開かれている。信仰養成に加えて、日本語の学習支援も行い、小中学生だけでなく、その家族、教会学校の卒業生や、高齢の日本人信徒も参加・協力しているユニークな教会学校だ。リーダーらは、教会学校が子どもを中心にした「みんなの教会」になってきた手応えを感じているという。教会学校は毎週土曜日、午後7時からの主日ミサの前の2時間半ほどを使って開かれる。前半の1時間が夕食、後半1時間半が学びの部。同教会の教育部が担当する取り組みで、ブラジル、ペルー、フィリピン、ベトナム、中国などにルーツを持つ小中学生10余人が参加している。



記事全文

書籍『ヒトラーを怖れなかったキリスト者たち』
著者・山縣光晶さんに聞く

ナチスの独裁体制に抵抗し、迫害を受けたドイツ、オーストリアのキリスト者18人の証しを記した『ヒトラーを怖れなかったキリスト者たち ナチスへの抵抗の足跡を旅する』（彩流社・3080円〈税込〉）が、今年5月に出版された。著者は、保土ヶ谷教会（横浜市）信徒の山縣光晶さん（76）＝写真⑥。山縣さんが実際に現地を巡り、史実を確かめながらまとめた1冊だ。山縣さんは7年ほど前、ふとしたきっかけから、ナチスを公然と批判して強制収容所に送られたイエズス会司祭、ルーペルト・マイヤー神父の存在を知る。（マイヤー神父は解放後1945年11月逝去。87年列福。本書5章で紹介）。ほかにも同様のキリスト者がいることを知った山縣さんは、「こういう素晴らしい人たちのことを知って、（日本の人々にも）知らせたい」と2024年10月からひと月半かけてドイツ、オーストリアに殉教者や果敢に抵抗したキリスト者たちの足跡を訪ねた。



記事全文

関東カトリック6大学 「灯」テーマにミサとシンポジウム

関東にある六つのカトリック大学の学生たちが6月13日、東京の麴町教会でミサとシンポジウムを行い、交流を深めた。主催は「関東カトリック大学合同プロジェクト2026実行委員会」。学生と司祭、修道者、教職員111人が集った。白百合女子大学、上智大学、聖心女子大学、清泉女子大学、東京純心大学、聖マリアンナ医科大学が参加。今回のテーマは「灯」。ミサ後に行ったシンポジウムでは各大学の代表者が大学の歴史や建学の精神を紹介。大学での活動や学びの中で考え、体験した「与えること、与えられること」について発表した。



記事全文

青森・八戸塩町教会 相次ぐ地震で壁にひび

6月25日、岩手県沖を震源とする最大震度6強の地震が東北地方北部を襲い、青森・八戸市の八戸塩町教会で、壁にひびが入るなどの被害が出た。八戸市は、昨年12月8日にも最大震度6強の地震に見舞われ、同教会で玄関ホールのイエス像が倒壊するなどの被害が出た。その時すでに外壁などに40箇所のクラック（ひび割れ）が発生。ひびに水が入り込んで鉄骨が腐食するとコンクリート壁が壊れる危険があるため、修理に向けて動いていた。そのさなかの今年4月20日、再び震度5の地震が八戸市を襲い、さらに6月25日と28日に地震が発生した。幸い、信徒宅の大きな被害情報は寄せられておらず、主日ミサは地震後も変わらずにささげることができている。



記事全文

教派超え日本の宣教を考える 日本宣教会全国研究大会

日本宣教会（金本悟理事長）は6月27日、第20回全国研究大会を関東学院大学・関内キャンパス（横浜市）で開催した。3人の研究者が日本におけるキリスト教会の宣教についての研究成果を発表し、オンラインも含め研究者ら52人が参加した。同学会は、カトリック、プロテスタント、東方教会などのキリスト教会の宣教や宣教学に関心を持つ人々の研究グループ（会員115人）。今回はプロテスタントの世界宣教のネットワーク、国際ローザンヌ運動総裁（CEO）のマイケル・オーさんが基調講演で韓国人宣教師である自身の体験を語ったほか、3人の研究者らが宣教に関する研究発表を行った。



基調講演でのマイケル・オーさん



記事全文

シグニス映画賞 『ふつうの子ども』呉美保監督が受賞

カトリックの精神に合致する普遍的テーマを扱った優秀な映画作品の監督に贈られる日本カトリック映画賞（主催SIGNIS JAPAN〈カトリックメディア協議会〉）。その50回目となる授賞式と受賞作品の上映会が7月5日、暁星学園講堂（東京・千代田区）で行われ、約800人が参加した。受賞作品は呉美保監督の『ふつうの子ども』。SIGNIS JAPAN顧問の晴佐久昌英神父（東京教区）はこの作品を、「子どもの魅力をきちんと描いたり、共有したりすることが、今の時代にとっても力のあることなのではないかと感じさせる映画」と語り、呉監督は、「小さいけど濃い映画が出来上がりました。この作品を見つけてもらい、受け入れてくれたことが、人生の糧になる気がします」と受賞への感謝を述べた。



呉美保監督



記事全文

回勅 人間の偉大さ AIの時代における人格の擁護

5月25日に発表された教皇レオ14世の初の回勅「マニフィカ・ウマニタス」(人間の偉大さーAIの時代における人格の擁護) 各章の要約を5回にわたって紹介します。ここに掲載する要約の原文と図版は、バチカンの総合的人間開発省が公開したものをカトリックジャパンニュースが訳したものです。回勅の公式訳は後日、カトリック中央協議会から書籍として発行されます。

序文 — 現代の新しい「事象」

新回勅は、その序文において、内容全体の概要を語ります。

今、人類は、歴史的に大きな岐路にさしかかっています。それは、社会の発展と人類の共存の真の意味に関わるものです。「今、神によって創られた素晴らしい人類は、これからの歩みにとって決定的となる一つの選択を前にしています」。それは、バベルの塔を新たに建てるのか(創世記11・1－9参照)、神と人が共に住む聖なる都を築くのか(ネヘミヤ記2－6章参照)という選択です。回勅は後者の選択を「ネヘミヤの道」と語ります。こうした聖書のイメージで描かれているのは、神を顧みずに自分の力を絶対化する道を選ぶのか、責任を分かち合う交わりの道を選ぶのか、ということです。

それぞれの世代は自らの時代を形づくるという使命を与えられています。しかし、どの時代も、非人間的で、正義に反する世界を建ててしまう危険性に直面しています。そのような歴史の歩みを理解するための基準になるのは、人間と神をどう理解するかについて受け継がれてきた教会の伝統です。人間の本質は、神の子が人となられたという受肉の神秘と切り離して考えることはできません。「人となられたみことばの神秘によってのみ、人間の神秘は真に明らかになるからです」

このような観点を持たないと、進歩とは、人を機能や統計や業績でのみ評価することだと誤解する危険に陥ります。現代の新しい事象である画期的な技術革新は、キリスト者の良心に対するチャレンジです。それは、デジタル化、人工知能(AI)、ロボット工学の急速な進歩に代表されるもので、社会構造、意思決定過程、集団意識などに深刻な影響を及ぼしつつあります。

テクノロジーは、人間の自由と創造性に根差した、人類の発展を向上させる要素として認められていますが、反面、その力は、これまでになかった新しい責任の在り方を呼び招いています。「かつて人類は自らに対するこれほどの権力を有したことはありません」。そこで、この権力を共通善に方向づけていくことが何よりも必要だと、回

勅は訴えます。だからこそ、聖書からの「バベルの塔」や「聖都エルサレムの再建」というイメージは、回勅全体にとって理解の鍵となります。今直面しているのは、テクノロジーを受容するか拒絶するかではなく、人間を傷つけ損なうために用いるのか、あるいは人間を守るために用いるか、の選択なのだということです。

第1章 福音に忠実な、 ダイナミックなアプローチ

回勅は、現代における事物の変化に取り組むための基本的な方法を明らかにしています。教会の社会教説(社会の諸問題に関する教え)は、固定化された規則のまとめでもなく、現実の上に外から押し付けられ

るイデオロギーでもありません。それは、福音の光によって歴史を解釈するために力になり、具体的な環境の中で生きている人々と共にある生きた伝承です。社会教説は、世界の外に身を置く教会からは出てきません。人々の人生の旅路を共に歩み、福音が人間の経験に関わっていく場として歴史を認識する教会から生まれるのです。

回勅が強調するように、社会教説とは、直面する問題に過度に干渉するものではなく、共通善を目指す上で教会自体が責任を持っているということを示すものです。教会は「キリストによって設立された、ある意味で神との親密な一致の秘跡、全人類の一致の秘跡だからです」。

この意識から傾聴と対話の態度が生まれます。それは真の霊による識別です。この関連で参考になるのは、第2バチカン公会議の指針です。「神の民全体…の課題は、聖霊の助けのもとに、現代の種々の声に耳を傾け、それらを識別、解明し、また神の

教皇レオ14世
最初の回勅



MAGNIFICA HUMANITAS
回勅 人間の偉大さ
AIの時代における人格の擁護

1/5
序文／第1章

現代の新しい「事象」(res novae)

リスク

- ・人工知能 (AI)
- ・デジタル化
- ・テクノロジーによる新たな力

△ 意思決定の自動化

△ 人間による制御の喪失

△ 権力の集中(公共性の後退傾向)

✂

「かつて人類は自らに対する
これほどの権力を有したこ
とはありません」MH 4

わたしたちの前に広がる二つの道の先

♡ バベルの塔

神なき人類
画一性
非人間化

聖都エルサレム ♡

神中心
豊かさである多様性
きょうだい愛／協働

✂

「人間共同体として、諸民族として、どちらの道路を選ぶべきでしょうか」MH 6

バベルの塔症候群

人間よりも利益を優先

人間を単なるデータへ

増大する不平等

尊厳の喪失

聖都再建を選ぶ
(ネヘミヤの道)

一緒に築き上げる

対話

耳を傾ける

包摂

責任の共有

✂

「世界が直面する諸課題の重荷を、一人の手で担うことはできません」MH 13

よりよい未来を築くための四本の柱

1 ♡ 神との絆

2 ♡ 人間の限界を
受け入れる

3 ♡ 共同責任

4 ♡ 一致を
育む言語

✂

「新たなかたちでの非人間化に直面し、わたしたちには、人間らしさを深く保ち続けるという、切迫した
責務があります。人間の偉大さを、愛をもって守り抜かなければなりません。人間性は、私たちに贈与
されたものであり、その偉大さは、いかなる機械にも映し得ないものです」MH 15

もう一つのバベルの塔を建てるのではなく、
交わりを築く者となりましょう。



DICASTERY FOR PROMOTING
INTEGRAL
HUMAN
DEVELOPMENT
www.humandevlopment.va

Provisional Japanese Translation © Catholic Bishops' Conference of Japan

要約 第1回

ことばの光に照らしてそれらを評価することによって、啓示された真理が絶えずより深く把握され、よりよく理解され、より適切に提示されるように努めることです」(『現代世界憲章』44)。このように、社会回勅は生き生きとした伝統であり、信仰の本質的な核心を放棄することなく、何年にもわたって成長していくものです。

回勅の第1章は、教皇レオ13世から現

代までの教会教導職による社会回勅の発展を振り返り、それが技術的解決策のレパトリーを示すものではなく、考えるための原理、識別のための基準、行動のための指針を提示するものであることを示します。社会回勅の役割は、政治や制度が持つ責任に成り代わるのではなく、今、世の中で進行しているさまざまな変化を共同で見極めていけるよう支援することなのです。

最後に強調されるのは、教会が守っている真理は、厳重に保持する所有物なのではなく、時間を通じて分かち合われるべき神からの恵みだということです。この理由から、回勅の第1章は「時は空間に勝る」と主張します。権力の座を奪い取ることも、むしろ歴史の歩みの上で、発展のプロセスが生まれることを何よりも優先しようと主張しているのです。

(第2章は次号掲載予定)

定例司教総会

2026年度 定例司教総会

『教会の祈り』改訂へ 作業開始を承認

日本カトリック司教協議会(会長＝菊地功枢機卿/東京教区)は6月15日から19日まで、東京・江東区の日本カトリック会館で2026年度定例司教総会を開いた。総会には司教17人が出席し、オブザーバーとして日本カトリック管区長協議会と日本女子修道会総長管区長会の代表4人も参加した。『教会の祈り—新しい聖務日課』の改訂や、ハラスメント防止・対応に向けた委員会の名称変更などが決議された。主な報告事項と審議事項は次の通り。

報告事項

▶第2回「司祭生涯養成プログラムA」は、叙階後5～8年および、23年実施の第1回で欠席した現在叙階後9～10年の司祭を対象として、27年5月、那覇教区内で開催予定。叙階後15～20年の司祭を対象に、海外で行う「司祭生涯養成プログラムB」は、アジアでの実施を軸に計画する。
▶2027年ワールドユースデー(WYD)ソウル大会は、本大会と、その前に韓国の各教区がホストとして開催する「教区での日々」(教区大会)から成る。教区での日々に向け、韓国の教区と連絡を取り始めている教区もある。

▶過去のWYDでは、周辺国の教会が通過地として短期滞在の受け入れや祈りの集い、青年同士の交流などを通じて巡礼者を歓迎した例も見られる。日本の教会は、WYDソウル大会においては、通過国として可能な範囲で巡礼者を支える。
▶司教協議会における公認団体の認定について、長らく2000年施行の公認団体基準を適用し続けていたが、用語、手続き、情報管理、援助基準などの面で整理や補充を行い、現状の実務、説明責任、社会的要請に応じた規定となるよう改定された。特に、公認団体に対する支援については、同一の対象団体等への継続支援は原則として行わないこととし、設立初期の活動基盤整備のため特に必要な場合に限り、年度ごとの審査を経て、3年を限度として支援を継続できる点が確認された。

審議事項

▶日本の教会が使用している現行の『教会の祈り—新しい聖務日課』は、第2バチカン公会議の典礼刷新に基づいて公布されたラテン語規範版『時課の典礼』初版の第1巻～4巻の省略版として発行された(1973年)。その後85年～87年に第

2版が公布されたため、第2版に準拠した『教会の祈り』の改訂が必要とされてきた。今回、本格的な改訂作業に着手するため、未翻訳箇所(の翻訳、現行の翻訳文の見直しを行うなどの作業方針を承認した。

▶福者ユスト高山右近の早期列聖を要請するため、全司教が署名した嘆願書を教皇庁列聖省に提出することを決めた。
▶2028年10月の教会総会に向けて、ともに歩む「シノドスの歩み」を続けるため、これまで日本の教会のシノドス的な歩みを推進する呼びかけを行ってきた「シノドス特別チーム」の名称を変更し、「シノドス特別委員会」として活動を続ける。
▶教会に寄せられる相談内容の多様化や、予防的取り組みに転換する必要性を踏まえ、ハラスメントに対応するためのガイドライン作りを行ってきた「未成年者等ガイドライン運用促進委員会」の名称を「セーフガーディング委員会」に変更することを承認した。「セーフガーディング」とは、子どもや障害者など、社会的に弱い立場にある人々を暴力、虐待、搾取、ハラスメント、事故などの危害から守り、安心・安全な環境を整えるための組織的な取り組みや仕組みを指す。同委員会は、①カトリック教会が既に持つハラスメント対応のためのガイドラインの改訂、普及・促進②ハラスメントの事例の責任者である教区、修道会などとの連携③ハラスメント防止に向けた啓発活動—などを行う見込み。



記事全文

文 化

映 画

『声をあげるとのこと—性犯罪 刑法改正の記録—』

2019年、日本各地で性犯罪に対する無罪判決が相次いだ。未成年の娘に対する実父の性虐待まで、被害者が抵抗しなかったとして無罪とされた。本作は、そうした状況に疑問を抱き、声を上げた人たちを5年にわたって追ったドキュメンタリー。悲しみや苦しみを語り始めた人たちの輪は、またたく間に47都道府県に広がった。弁護士や国会議員と連携して23年7月の刑法改正へとつながっていく。



© 2026 Tokyo Video Center



記事全文

月刊誌

『MOSTLY CLASSIC』

8月号

クラシック音楽専門の月刊誌『MOSTLY CLASSIC』8月号では、特集「クラシック音楽の源流 キリスト教を知る」として、キリスト教関係者らがさまざまな視点からクラシック音楽にキリスト教が与えた影響などを解説している。カトリックからは、アンドレア・レンボ補佐司教(東京教区)や對馬榮子修道女(聖母被昇天修道会)のインタビュー、晴佐久昌英神父(東京教区)の寄稿などを掲載。レンボ司教はベートーベンやモーツァルトの音楽とキリスト教とのつながりについて解説する。



記事全文

定例司教総会

2026年平和旬間 日本カトリック司教協議会会長談話
「連帯のうちに平和な世界を築く」

日本カトリック司教協議会会長の菊地功枢機卿は7月10日、今年の平和旬間（8月6日～15日）に向け、「連帯のうちに平和な世界を築く」と題する会長談話を発表した。戦争や紛争が世界各地で人々を傷つけ、日本でも安全保障政策が大きく変化する中、全ての人の尊厳を守ることが平和の出発点だと強調。教皇レオ14世と共に平和への道を歩み、祈りと行動を通して「愛の文明」を育てようと呼びかけている。

菊地枢機卿は、戦後81年となる今年も広島、長崎への原爆投下の日を中心に据える平和旬間を迎えるに当たり、過去の記憶を胸に刻み直し、現在の世界を見つめ、将来への責任を問い直すよう促した。

日本の司教団が昨年、戦後80年に際して発表したメッセージ「平和を紡ぐ旅 ―希望を携えて―」にも言及。戦争そのものの恐ろしさだけでなく、日常の中で思想や価値観が植え付けられ、知らぬ間に世論が戦争へ向かう危険を80年前の経験から学ぶ必要があるとの指摘を改めて示し、「今の日本は、果たして平和への道を進んでいるのでしょうか」との問いが、ますます大き

な意味を持っていると述べている。

また、1981年に聖ヨハネ・パウロ2世教皇が広島で語った言葉、「戦争は人間の仕業です」を引用。ウクライナ、スーダン、ミャンマー、ガザをはじめとする中東地域などで戦争や紛争が続き、神の似姿として創られた一人一人の命が奪われている現状を指摘した。暴力が「やむをえないもの」として正当化され、国際人道法や人間の尊厳という普遍的原則、多国間主義の枠組みが揺らいでいることにも強い懸念を示した。

日本については、憲法9条の解釈変更や防衛費の急増、長射程ミサイルの配備、南西諸島での自衛隊配備強化、殺傷能力のある武器の海外輸出を巡る政策変更などを挙げ、「専守防衛」の実質が大きく変化していると指摘。憲法の平和主義は、先人が戦争の惨禍から学び取った「大切な知恵」だとし、十分な国民的議論を経ない軍備増強が真の平和につながるのか、考える必要があると訴えた。

談話は、4月にカメルーンを訪問した教皇レオ14世の言葉を紹介。教皇は平和の集いで、「人間的な兄弟愛に満ちた持続可

能な道へ向かう「決定的な方向転換」「真の意味での回心」を呼びかけ、「世界は一握りの暴君たちによって荒廃させられています。しかし、世界は連帯する多くの兄弟姉妹によって支えられています」と述べた。

さらに教皇が、平和を築くことは政治的活動ではなく福音に基づく使命であり、教会の福音宣教における優先事項だと明確にしていることを強調。「戦争に強く反対し、平和を促進し、問題解決のために各国間の対話と多国間主義を推進し続ける」「だれかが立ち上がり、よりよい方法があるというべきだ」との教皇の発言も紹介した。

菊地枢機卿は、こうした教皇の姿勢は「まさしく教会全体の立場」だと述べ、第2バチカン公会議『現代世界憲章』の精神に従い、苦しむ人々と愛のうちに連帯し、命を守り、希望を生み出すよう呼びかけた。

「すべてのいのちは神からの尊いたまもの」と強調し、国籍、民族、宗教を問わず、あらゆる人に神から与えられた尊厳を守ることが平和の出発点だと訴えた。平和のために祈り、行動し、命の尊さの記憶を語り継ぐとともに、日々の生活で「力のことばではなく愛のことば」を選び、主イエス・キリストの「いのちの福音」を身近な人々の間に広めていこうと結んでいる。

メッセージ全文はこちら→



2023～26年叙階の司祭・助祭・終身助祭

2023年から26年までの間に叙階された司祭・助祭・終身助祭を、数回に分けて紹介する。
①洗礼名・名前②叙階時の年齢③叙階年月日④叙階場所⑤現在の活動⑥受階者のメッセージ

◆司祭

【札幌教区】

①ペトロ 千葉充^{みつる}②47歳③2024年3月20日④札幌カトリック北一条教会⑤北一条・月寒^{つきさむ}・真駒内^{まこま}・北広島^{えにわ}・恵庭・千歳教会共同主任⑥夏は猛暑、冬は大雪に埋もれる札幌の教会で、神学生の時に大先輩の神父様から言われた言葉を時々思い出しています。「君たちは『ミサも』できる神父ではなく、『ミサが』できる神父になってください」。この言葉の深い意味は、時を重ねてこの身に染み入るのでしょうか。そんな未来を思い巡らしながら、平生を精いっぱい^{へいぜい}のささげものとして、歩み続けたいと思います。



【横浜教区】

①ヨセフ トラン・ヴァン・グエップ②36歳③2025年8月4日④信仰の宣教修道会ベトナム管区本部聖堂⑤山手教会助任⑥司祭叙階を受けてまだ間もないため、毎日の司牧の中で多くのことを学びながら歩

んでいます。信者の皆さまとの出会いや日々の祈りを通して、神様が働いてくださっていると感じています。未熟ではありますが、一人一人に寄り添いながら、少しでも神様の愛と恵みを届けることができる司祭になりたいと願っています。これからも祈りと学びを大切に、神様に信頼して歩んでいきたいと思っています。よろしくお願い致します。

①ペトロ ホアン・ドゥックナン②34歳③2025年8月4日④信仰の宣教修道会ベトナム管区本部聖堂⑤二俣川教会（横浜市）で助任司祭として働き、ベトナム人信徒の司牧にも携わっています。⑥神の愛と、皆さんからのお祈りとさまざまな支えによって司祭叙階のお恵みを頂き、司祭職の歩みをスタートすることができました。心から感謝致します。叙階を前に、自分は「とにもいる司祭になろう」、つまり司祭として神と、そして人々との関わりの中で歩んでいこうと決心しました。叙階されてから



①

まだ一年もたちませんが、司祭として皆さんとともにいる喜びを日々、強く感じています。「キリストによって、キリストとともに、キリストのうちに」いろいろな出会いを通して、これからも皆さんと歩み続けたいと思います。特に、司祭職の務めであり恵みである諸秘跡を通して、皆さんの信仰生活に寄り添うことができるよう願っています。



【京都教区】

①ライムンド 出水洋^{みずひろし}②49歳③2024年3月20日④京都カトリック河原町教会⑤主に彦根教会と長浜教会を担当しております。どちらも外国人信徒が多い小教区で、国際ミサを5カ国語で行っています。⑥司祭として心がけていることは、「神の前では、みんなきょうだいであり家族であり親友同士であること」。信徒の皆さまには、ご自身の家族に気を遣わないように、私にも気は遣う必要ありません、私も皆さまの家族なのだから…と言っています。



主日の福音解説

8月2日（年間第18主日）
マタイ 14・13－21

世に広がる祭壇

今週朗読されるのは、いわゆる「パンの増加の奇跡」と呼ばれている箇所である。四つの福音書全てがこの物語を伝えているが、強調点は異なる。例えばヨハネ福音書には最後の晩さんにおける聖体制定の記述がない代わりに、パンの増加などを含む第6章の全体を使って聖体の神秘を明らかにするという特徴がある。ところがマタイ福音書には聖体制定の記述があり（第26章）、その上でパンの増加においても聖体を思わせる響きを与えている。何故であろうか。

まず注目したいのは、イエスが群衆を座らせた場面である。ギリシャ語ではアナクリノーという動詞が使われている。これは単に腰を下ろすという意味の座るではなく、横たわる、食事の席に着くという意味を含み持つ語である。ルカは生まれたばかりの幼子を「飼^{おけ}い葉^は桶^{づく}に寝かせた（＝アナクリノー）」（ルカ2・7）と記す際にも同じ動詞を用いている。日本語で横^{おう}たわるといえば休息や睡眠を連想しがちだが、古代地中海世界には横^{おう}臥^がして食事をする習慣があった。最後の晩さんも同様であったと考えられている。つまりイエスは群衆をただ草原に座らせたのではなかった。彼らを神の食卓に招かれた者として整えたのである。

次に注目したいのは、これがエウカリスチア（感謝の祭儀）をほうふつさせる箇所でありながら、そこには祭壇も特別な空間も用意されていない点である。あるのは、草の上に広がる群衆の姿、夕暮れ、そして乏しいパンだけである。しかし、それが主の食卓になったのである。このことは聖体が閉ざされた空間の中で、特定の人間によってのみ守られるものではないことを示唆している。イエスはパンを取り、賛美し、裂き、弟子たちに与える。弟子たちはそれを群衆に配る。この流れは最後の晩さんを思い起こさせると同時に教会の姿を示している。教会はキリストから命のパンを受け取り、それを人々の飢えの中へ運び出す共同体である。聖体は内側に閉じこもるためのものではなく、世界とつながるためのものである。私はここに「出向いていく教会」の原型が描かれていると考えてみたい。

最後に、この箇所では私たちの奉獻が問われている。ミサにあずかるとは聖体を「頂く」ことだけではない。弟子たちは五つのパンと2匹の魚を差し出したのである。それは群衆の前ではあまりにも貧しいものであった。しかし、イエスの手に渡されると人々の飢えを満たすものへと変えられた。私たちもミサの中で貧しいものを差し出すのである。1週間の疲れ、弱さ、失敗、それらを全部祭壇に置くのである。

聖体とはキリストを頂く神秘であると同時に、私たちの貧しさがキリストの手に渡され、誰かを生かすパンへと変えられる神秘でもある。だからミサは、頂く場であり、ささげる場であり、遣わされる場でもある。

こうした側面は最後の晩さんの記述だけでは十分に語り尽くせない。だからこそ、マタイはパンの増加の出来事を書き足し、そこに聖体を思わせる響きを与えたのではないか。草原で始まったこの食卓は、今も世界の飢えと混乱の中へと広がっているのである。



（熊川幸徳神父／サン・スルピス司祭会）

8月9日（年間第19主日）
マタイ 14・22－33

試練に向かうキリスト者

イエス・キリストを信じる人は幸いです。私たちの信仰生活はいつも幸せだとは限りません。ひどい目に遭うたびに、私たちは「本当に神は全能なのか」と疑いを抱き、なぜこんな試練や苦しみを与えられるのかと、恨みさえ感じることもあるでしょう。そのような私たちに、今日の福音は大きな慰めを伝えています。

イエス様は群衆を満腹にさせてからお一人で山に登られました。弟子たちはしばらくの間、イエス様から離れることになりましたが、これは弟子たちではなくイエス様の望みでした。その間、弟子たちは逆風に遭い大きな波に悩まされてしまいました。弟子たちはもともと漁師で、船に関してはベテランだったので、できることは何でもやってみたとします。ところがその波を避けることはできませんでした。それは、私たちの努力では、押し寄せてくる試練や苦しみの波を避けることができないということを意味します。



そんな弟子たちにイエス様ご自身が近寄ってこられます。ところが、命の脅威に苦しむ弟子たちが叫んだ言葉は「幽霊だ」でした。実に、私たちが霊的に深い困難の中にいる時、自分に近寄ってくるのがイエス様なのか、悪霊なのかよく分かりませんし、誰かが近寄ってくるだけでひどく警戒することもあるでしょう。弟子たちはそのような私たちの姿をよく映し出しているのです。

イエス様は「わたしだ」と言われますが、ペトロは信じられず、「主よ、あなたでしたら、わたしに命令して、水の上を歩いてそちらに行かせてください」ととんでもないことを願います。イエス様ならば可能にしてくださると思ったのでしょう。「来なさい」という返事を聞いたペトロは、イエス様だけを見て、誰もできなかったことに乗り出します。仲間には非常に愚かに見えたかもしれません。まるで自殺行為みたいなことだからです。ところがペトロはイエス様だけを見つめ、イエス様に向かって水の上を歩くことができました。

ところで、ペトロの目は一瞬、イエス様から離れ、強い風、波、そしてその中に立っている自分の弱さに捕らえられます。自分は水の上を歩くなど絶対にできないと思い、恐怖に襲われた瞬間、実際に命が危うくなりました。そうして初めて、ペトロは「主よ、助けてください」と完全に自分自身をイエス様に委ねます。そして、イエス様の手を取って再び船に乗り込むと、波は影も形もなくなり、いつの間にか穏やかになっていたのです。

イエス様がどうして先に波を静めてくださらなかったのかを考えてみます。ペトロは二度も命の脅威を経験して初めて完全に自分自身をイエス様に委ねることができました。私たちがイエス様に向かって歩いていく道において、このようなことがきっとあるはずです。イエス様は、その時に出てくる私たちの心からの真実な祈りを望んでおられるのでしょう。私たちは「安心しなさい。わたしだ。恐れることはない」と慰めてくださるイエス様に目を向けて、この道を歩み続けるのです。

（ダニエル・キム・ドンウク〈金桐旭〉神父／韓国殉教福者聖職修道会）

8月16日(年間第20主日)

マタイ 15・21－28

メガ盛りの信仰

苦しむ子ども、そのいのちのために「あわれんでください（いつくしみを）」と願う、一生懸命なお母さんに、イエス様は「すごいね！ あなたの信仰はとても大きい。あなたが望むように起これ」と神様のあわれみ（いつくしみ）をお示しになりました。

この「大きい」という元の言葉は「メガ」で、私たちがお店で注文の際に「メガ盛りで」と頼む、あの「メガ（大きい）」です。

今風にいえば、「あなたの信仰はメガ盛りだ」です。信仰がメガ盛りとはどういうことでしょう？

それは苦しむいのちのために一生懸命なこと、そのいのちを自分のいのちとすることです。イエス様はこのお母さんの姿に「わた

しの母のような方だ」とマリア様を重ねて見られたことでしょう。

イエス様は苦しむいのちをご自分の苦しみ、ご自分のいのちとしてくださいます。ご自分の母がいつもそうされていたように。

それに比べて今日の弟子たちの信仰は？ レギュラーサイズでも、スモールサイズでもなく、失敗です。弟子たちはイエ

ス様に「叫びながらついてくる、この人を去らせてください」と願いました。この人は困っていても異邦人、わたしたちの仲間ではないので関わる必要がないと考えていました。

イエス様も「イスラエルの家の救うことに失敗した羊への他には私は遣わされていない」とお答えになりました。しかし、イエス様はそのお母さんに「あなたよりも先に救うべき人々がいる」とお答えになったわけでも、その信仰を試されたわけでもありません。「救うことに失敗したイスラエルの羊」とは、この日の弟子たちのことだったのではないのでしょうか？ 困っている人に手を差し伸べないどころか、去らせようとした。人の苦しみに無関心、とても救われているとは言えません。あわれみ（いつくしみ）は自分たちだけが救われることではなく、人の苦しみに気付くこと。その苦しむいのちのために一緒に叫ぶことです。イエス様はまず先に、この救うことに失敗したイスラエルの羊である弟子たちに苦しむいのちを自分のいのちとすることができる、やさしいところをとお考えになられたことでしょう。

わたしの家は、すべての民の祈りの家と呼ばれる。（イザヤ56・7）

祈りの家とはイエス様、今日のお母さんと元気になった子ども、そして弟子たち、わたしたちとマリア様。分け隔てのない全ての人々のことです。みんなで一緒に祈り続けます「主よ、いつくしみをわたしたちに（主よ、あわれみたまえ）」と。

全てのいのちにあわれみ（いつくしみ）がメガ盛りとなるように・・・。

（寺浜亮司神父／福岡教区）

8月23日(年間第21主日)

マタイ16・13－20

あなたは神の子です

「わたしを何者だと言うのか」とイエスから問われたまな弟子たちを代表して、ペトロはイエスのことをメシア、神の子ですと信仰告白します。ペトロの信仰告白を受けたイエスは教会を建てることを宣言し、ペトロに天の国の鍵を授けたというのが本日の福音の内容です。

宣教の旅を続けているイエスはある時、「人々は、わたしのことを何者だと言っているか」と弟子たちに尋ねます。弟子たちは普段から耳にしていることをありのまま伝えます。「洗礼者ヨハネ」「預言者エリヤ」「預言者エレミヤ」「預言者の一人」というのがそれです。イエスの周りに集まっている人々はイエスのことを救い主ではなく、預言者に過ぎないと見ています。

人々の評価を聞いた上でイエスはあらためて「それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか」と弟子たちに質問します。シモン・ペトロが「あなたはメシア、生ける神の子です」と信仰告白をします。この信仰告白を受けたイエスはペトロを祝福します。ペトロが信仰告白することができたのは「わたしの天の父」が働きかけてくれたからだと説明されています。ペトロが褒められたというよりも、イエスが誰であるかをペトロに示してくださった父である神が賛美されています。

イエスはシモンにペトロ（岩）という名前を与えますが、それはその岩の上に教会を建てるからです。この岩というのはイエスのことばということです（マタイ7・24－25参照）。岩はペトロの象徴であると同時にイエスのことばの象徴でもあります。教会は神のことばを聞いて行う者の集いです。教会がそのようなものであり続けるための土台としてペトロは選ばれたのです。

さらにペトロには天の国の鍵が授けられます。その結果、「あなたが地上でつなぐことは、天上でもつながれ、地上で解くことは、天上でも解かれる」ことになります。

ペトロに与えられた鍵は律法学者が所持しながら正しく用いていない鍵（マタイ23・13、ルカ11・52参照）に比較されています。ペトロに与えられた鍵は人々が天の国に入るように用いなければなりません。律法学者に与えられた鍵は律法（おきて）、ペトロに与えられた鍵はイエスの教え（福音）です。

（立花昌和神父／東京教区）



主日の福音解説

8月30日(年間第22主日)

マタイ 16・21-27

そんなことがあっては…

愛する人から「私は多くの苦しみを受けて殺される」などと宣言されて動揺しない人はいないでしょう。重い病気が悪化してしまった人から、「私は死ぬかもしれない」と本心を打ち明けられることはあるかもしれませんが、イエス様のこの言葉はまるで自ら殺されに行くような印象すらあります。

だからこそ、ペトロの反応は私たちにはとても自然なものとして映るでしょう。「主よ、とんでもないことです。そんなことがあってはなりません」。しかしイエス様は「サタン、引き下がれ」と真っ向から戒めるのです。イエス様に死んでほしくないという切実な思いにこのように答えたのは何故でしょうか。戒めに続く「神のことを思わず、人間のことを思っている」とは何を指し示しているのでしょうか。

「神のこと」については、十字架の死と復活を信じる人にとって、イエス様が苦しみを受けて殺されることは神様の計画だったと知っています。それを阻むことは人類の希望を閉ざそうとすることに等しいため、イエス様が戒められ

たのにも納得ができます。どのような苦しみなのかも理解していたはずだと考えると、すさまじい覚悟を持っての一言だったと思います。



さて、その上でペトロの発言を思い起こしてみると、神様の計画を阻んでも自分を安心させようという目的が推測できます。なるほど、サタンの働きも想像できるレベルで、まさに「人間のことを思っている」時の発言になります。

しかし、ペトロのこの思いは、私たちにとって他人事ではありません。たとえ「死んでほしくない」というような切実な思いであっても、自分が何を望んでいるのかを見つめる必要があります。ともすると、単に自分を動揺させてほしくないから、自分が見たくないものを避けたいから、自分に大変なことが引き継がれるから、そのような思いが優先されてはいないでしょうか。

そこでイエス様は「自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのために命を失う者は、それを得る」と教えてください。イエス様はその愛のゆえに、全ての人のために全てをささげて共に歩んでくださいます。私たちも自分のことを二の次にして、共に歩もうとする心を備えていたいものです。死を意識する人の声を聴きましょう。自分にできる支援があれば与えましょう。できることがないとしても、祈りましょう。心の支えになる人の存在、そこから伝わる神様の愛こそ、苦しむ人にとって何よりの希望の光となります。

(大久保 武神父／大阪高松教区 カットは全て高崎紀子)

文化

短歌

春日いづみ

毎月5日まで(必着)、はがきに3首以内。1人1枚を厳守。氏名に振り仮名を明記。送り先は俳句欄左下に記載。下記QRコードからオンライン投稿も可



はつなつの波ひたひたと足洗ふさあ新しき人となれわたし

福岡 三谷 淑美

【評】初夏の海辺、素足に寄る波が足を洗っていると感じ、清新な気分を満たされている。ふと内奥から湧き上がる促し、古い人を脱ぎ捨て神のみ心になう「新しき人」へ。心身の目覚めが鮮やかに表現されている。

トコトコと歩くブリキの兵隊のかつぐ銃捨てさらにネジ巻く

秋田 畑山真理子

ほのぼのと蛍袋は咲きいでぬ今年も亡き子の魂遊ぶ庭

秦野 遠藤 伸枝

六番の方とはただ今われを指すはいと返事す待合室に

熊本 矢澤 麻子

亡き母の聖書を開く講座にはヒロメナ普子共に居りけり

青梅 島田 公江

午前五時月の灯りでシャツを干す宇宙飛行士が笑っているか

那覇 上間 良彰

ガザ、イランに罪の歴史の重ねらる幼子の叫びラケルの慟哭

枚方 宮永 久人

鈍感なわたしのかはりに右側の肋骨のひびがしくしくと泣く

青梅 重吉 知美

教室に漲る力生徒らの一途な眼いかに応えむ

広島 瀬尾 直子

イタリア語に「マンマ」唄ひぬし日々を置き去りに此処まで来てしまひしよ

熊本 村田 弘子

俳句

稲畑廣太郎選

◎亡き吾子の齡かぞへつ春はゆく

川崎 守田 光代

【評】春が命日のお子様を毎年偲ぶ姿が神々しい

立川 中村 克久

◎予報聞く間髪いれず日雷

東京 岩村 恵子

【評】予報を聞いた瞬間の雷の迫力が見て取れる

福岡 木本 敬子

風薫る俳句一筋なる余生

蓮田 向田 良子

聖五月今日の別れの茜雲

調布 田邊 久義

梅雨曇終活本を前にして

三原 村田 和男

梅雨さなか朝から光る遊技場

東京 脇谷 善之

方舟の座礁のやうな鴉の巢

川崎 吉田千津子

浅蜷飯司祭を送る会となり

神戸 屋代 弘忠

下野の新茶の色と香かな

長崎 中村 達見

病院のルルドにベンチ藤の花

東京 草間をり絵

美祢線の二両編成青葉風

秋田 畑山真理子

神父様今日はお休み夏帽子

聖霊は光となるや麦穂波

福岡 細川 武子

病えて暗き心に若楓

芦屋 高島 淑子

花撒きの花びら高く聖五月

大阪 酒井 湧水

若葉風安産祈るミサへの歩

神戸 内田 泰代

すみれ摘む小さき風をつまみつつ

大牟田 岩永美智子

万緑の色整へて雨上がる

選者吟

投稿規定

短歌・俳句共に、未発表の自作をはがきまたはオンラインで送りください。一回につき短歌は1人3首まで、俳句は5句まで。お名前に振り仮名を付けてください。はがきの送り先は、〒135-8585 東京都江東区潮見2の10の10 カトリック中央協議会広報部広報課「短歌係」または「俳句係」。締め切りは毎月5日(必着)です。作品は選者の先生によって添削されることがあります。

毎月5日まで(必着)、はがきに5句以内。氏名に振り仮名を明記。送り先は左下に記載。下記QRコードからオンライン投稿も可。



討 報

マリア・アスンシオン・レクバリ
修道女(聖心侍女修道会) 5月2日、東京都内の病院で老衰のため逝去。104歳。1921年スペイン・サンタンドール生まれ。41年同会入会。43年初誓願。若い時から宣教に燃え、48年来日し、翌年終生誓願を立てた。第2次世界大戦後の日本で、同会の土台を築き上げることに努めた。特に各種のカトリック学校の設立に尽力。清泉インターナショナルスクール(東京)では校長を25年間務め、生徒たちの教育・成長に貢献し、同校の米国および欧州の大学との提携(国際バカロレア)を実現した。定年退職後は、さまざまな国で活躍する卒業生との密接な関係を大切にし、多くの示唆と励ましの源となった。大きな心の持ち主であり、特に、完璧な決断力と豊かな包容力に富んでいた。修道会の必要に応じて、多くの国々に赴き、宣教者としての使命も大いに果たした。晩年には、体力が衰え、車いすの生活を強いられたが、その鮮明な記憶力と優れた知性は常に卓越していて、訪問してくる卒業生の一人一人のことをよく覚えていた。最後には、大腿(だいたい)骨の骨折と肺炎などにより、体力が次第に衰え、主のみ手に全てを委ねて、長寿を全うした。

熊谷シズ子修道女(ショファイユの幼きイエズス修道会) 6月5日、熊本市内の病院で右下肺がんのため逝去。91歳。1935年長崎県生まれ。京都聖嬰(せいえい)会(京都)、マリア園(長崎)、久留米天使園(福岡)の各児童養護施設で保育士、施設長、院長を歴任した。現場を退いてからは、長崎、熊本、神戸、久留米(福岡)の修道院で院長として、また院内で、労を惜しまず喜

んで精いっぱい働き、共同体のために奉仕した。さっぱりした明るい人柄で、神と人との率直な交わりを生き、64年7カ月の奉獻生活の多くを子どもたちの幸せのためにささげた。最後のホスピスでの約4週間は、生活を祈りの奉仕にささげ、91年の生涯を信仰のうちに教会と共同体への奉仕に生き抜いた。

国原武志神父(聖ザベリオ宣教会) 6月29日、宮崎市内の同会共同体で老衰のため逝去。94歳。1932年イタリア・バジリカータ州生まれ。日本国籍取得前の名前は、カルメロ・フォルナバイオ。50年同会入会。54年終生誓願。58年に司祭叙階後、すぐに日本に派遣された。神戸での日本語研修を経て、岸和田、浜寺(以上大阪)、延岡、宮崎(以上宮崎)の各教会で助任司祭として奉仕。66年から83年まで垂水(たるみず)主任、83年から2011年まで国分主任を務め、同期間に国分幼稚園園長として幼児教育にも尽力した(以上鹿児島)。11年から23年までは串間教会(巡回)で協力司祭として奉仕し、晩年は宮崎・江平の共同体で療養生活を送った(以上宮崎)。深い信仰と謙遜な人柄で知られ、司祭叙階50周年の際に総長へ宛てた書簡では、自らの弱さを率直に認めつつ、「私の唯一の慰めは、神の限りないいつくしみへの揺るぎない信頼です」と記し、神への信頼を生涯の中心に据えていたことがうかがえる。「祈りの中で私のためにほんの小さな場所を与えてくださるなら、それは何よりも素晴らしい贈り物です」と述べるなど、兄弟司祭への敬意と感謝を忘れなかった。謙遜のうちに宣教への献身を貫いた生涯は、教会共同体に確かな証しを残し、多くの信徒に深い感謝と敬愛をもって記憶されている。



れ。日本国籍取得前の名前は、カルメロ・フォルナバイオ。50年同会入会。54年終生誓願。58年に司祭叙階後、すぐに日本に派遣された。神戸での日本語研修を経て、岸和田、浜寺(以上大阪)、延岡、宮崎(以上宮崎)の各教会で助任司祭として奉仕。66年から83年まで垂水(たるみず)主任、83年から2011年まで国分主任を務め、同期間に国分幼稚園園長として幼児教育にも尽力した(以上鹿児島)。11年から23年までは串間教会(巡回)で協力司祭として奉仕し、晩年は宮崎・江平の共同体で療養生活を送った(以上宮崎)。深い信仰と謙遜な人柄で知られ、司祭叙階50周年の際に総長へ宛てた書簡では、自らの弱さを率直に認めつつ、「私の唯一の慰めは、神の限りないいつくしみへの揺るぎない信頼です」と記し、神への信頼を生涯の中心に据えていたことがうかがえる。「祈りの中で私のためにほんの小さな場所を与えてくださるなら、それは何よりも素晴らしい贈り物です」と述べるなど、兄弟司祭への敬意と感謝を忘れなかった。謙遜のうちに宣教への献身を貫いた生涯は、教会共同体に確かな証しを残し、多くの信徒に深い感謝と敬愛をもって記憶されている。



告知板

■北海道

▶シリーズ宗教と社会の対話(問いを旅する)第1弾 宗教×福祉×地方創生「いのちを支える場所へー宗教・医療・地域が会おうと」 8月23日(日)午後2時

～4時、日本バプテスト連盟 札幌バプテスト教会(札幌市)。登壇者＝岡本亮輔(北海道大学教授)、香山リカ(精神科医)、問芝(といしば)志保(東北大学大学院文学研究科准教授)、松谷信司

(「キリスト新聞」編集長)。下記QRコードから要申し込み。定員100人。参加費1,000円。✉shinkichi1109@gmail.com キリスト新聞社 ■東 京



▶企画展「ハンセン病療養所のなかの『外国人』」 11月29日(日)まで、国立ハンセン病資料館(東村山市)で開催。会期中、ギャラリートークや講演会などのイベントあり。開館時間＝午前9時30分～午後4時30分(入場は午後4時まで)。休館日＝月曜日および「国民の祝日」の翌日(月曜が祝日の場合は開館)。無料。電話042-396-2909 国立ハンセン病資料館

▶日本カテキ斯塔会公開講座「新しいカテケージス指針 ITとグローバル化の現代においてカテケージス(信仰教育)の本質と目的を解釈し直す」 8月28日(金)午後0時30分～5時(第1、2講話)、8月29日(土)午前10時～午後3時30分(第3、4講話、派遣ミサ)、幼きイエス会ニコラ・バレ修道院9階大ホール。講師＝原敬子修道女(援助修道会、上智大学神学部教授／第1講話)、高

見三明(みつあき)名誉大司教(長崎教区／第2講話)、中村倫明(みちあき)大司教(長崎教区／第3講話)、竹内修一(おさむ)神父(イエズス会、上智大学神学部教授／第4講話)。メール(nckkate@gmail.com／名前、住所、所属教会、参加日を記入)または電話(090-8119-4494)で要申し込み。両日参加は3,000円、28日または29日のみ参加は2,000円。28日の講話終了後、食事会あり(参加費3,500円)。電話090-8119-4494 カトリック日本カテキ斯塔会

■鹿児島

▶『聖イグナチオの霊操』ちょっと体験 2泊3日の黙想会 8月28日(金)～30日(日)、溝辺教会・祈りの家マリア山荘。詳細日程はウェブサイト(下記QRコード)参照。指導＝貴島丈弥(じょうや)神父(鹿児島教区)。ウェブサイト、または電話(090-1973-5491)で要申し込み。人数制限あり。参加費3,000円(宿泊希望者は別途10,000円)。電話090-1973-5491 川下(かわした)



番組

ラジオ心のともしび

(朗読・坪井木の実) 8月の放送日と執筆者 1日(土)熊本洋(よう)・3日(月)三宮麻由子・4日(火)松浦信行・5日(水)松本准平(じゅんぺい)・6日(木)許書寧(きょ・しゅにん)・7日(金)竹内修一・8日(土)コリーン・ダルトン・10日(月)岸本景子・11日(火)片柳弘史・12日(水)萩原久美子・13日(木)古橋昌尚・14日(金)古川利雅・15日(土)村田佳代子・17日(月)岡野絵里子・18日(火)中島貴幸・

19日(水)植村高雄・20日(木)山本久美子・21日(金)森田直樹・22日(土)こいずみゆり・24日(月)今井美沙子・25日(火)山本ふみり・26日(水)堀妙子・27日(木)服部剛(ごう)・28日(金)越前喜六・29日(土)谷口恵美(めぐみ)・31日(月)崔友本枝(ちえーともえ)(以上テーマ「豊かさ」)。ウェブサイト(下記QRコードでアクセス可)では24時間視聴可能。心のともしび、詳細は電話075-211-9341。



お知らせ 中央協出版局ゆうちょ口座変更

カトリック中央協議会出版局は、7月末日をもって下記ゆうちょ銀行口座を閉鎖した。

・ゆうちょ銀行〇一九店(店番019)、(口座番号)当座0880256、(口座名)(宗)カトリック中央協議会データ口、(記号・番号)00160-1-880256

現在使用の口座は、次の通り。

・ゆうちょ銀行〇一九店(店番

019)、(口座番号)当座0166518、(口座名)宗教法人カトリック中央協議会、(記号・番号)00190-4-166518

『毎日のミサ』年間購読料等の送金先として旧口座を登録している場合は、上記口座に変更が必要となる。

問い合わせは中央協議会出版局(電話03-5632-4429)まで。

きょうをささげる(教皇による祈りの世界ネットワーク)8月

【教皇の意向：都会での福音宣教】

匿名性と孤独で特徴づけられる大都会で、福音を宣べ伝える新しい道を見出し、共同体を築くための創造的な方法を探し出すことができますように。

【日本の教会の意向：世界の平和】

世界平和のために祈ります。戦争・紛争当事国の指導者が、対話による和解を促進し、平和を実現するために力を尽くすことができますように。

大都会では毎日、何千もの人々が互いにすれ違っていますが、誰とも深くつながっていません。ネット世界の助長によって表面的な

つながりがありますが、多くの人々は無名で深い孤独の中に生きています。しかし、どの人も真のつながりを求めています。前教皇フランシスコは『福音の喜び』の中で人々の中に出ていく教会となるよう訴えました。人間は、誰でも神の前で唯一無二の存在です。私たちは人々の中に出向いて、一人一人を愛し、寄り添っておられる神との出会いを助ける務めに招かれています。評価や競争を離れ、人々に「心の居場所」や「存在の意味」を与える、小さくとも創造的な交わりの場をつくっていきけるよう祈りましょう。

＊

世界を見渡すとウクライナ、中東やミャン

マーをはじめ各地で武力紛争が絶え間なく続いており、収束の兆しが見えません。教皇レオ14世はスペイン訪問の際、サグラダ・ファミリア教会のミサで「イエスを信じながら戦争はできない」と説教で述べました。私たちは武力によってではなく対話による和解によって紛争を解決するようイエスから求められています。子を失う母親の悲しみを感じる心は対立を超えて同じです。大切なのは相手を敵視せず、尊厳を持つ人間、神に愛された存在として理解し、真実に基づく正義と赦す心が必要です。イエスに倣う道は簡単ではありませんが、各国の指導者が真摯な対話を通して和解への道を歩むよう祈りましょう。